九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[13] Crossover

https://doi.org/10.15017/19349

出版情報：Crossover. 13, pp.1-33, 2002-05. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

論文を書き終えて

児童教育学から地球科学への旅

藤　井　理　恵
（地球自然環境講座）

第15回ヒマラヤ−チベット−カラコルム
国際ワークショップのポスターセッションで発表する筆者

5年前の1997年に、文学部児童教育学科から地球科学の世界に飛び込んだ。地球科学に関してゼロからのスタートだったので、最初の修士2年間は右も左も分からず、ただ真っ直ぐに無我夢中で室内実験、野外調査、演習、勉強をこなす毎日であった。

文系から理系に転向して、毎日が驚きと感動の連続で、その中でも一番驚いたのが、演習のやり方であった。文系の時は自分が演習で発表する時、プリントを用意して皆に配り、それを読みながら進めていった。しかし、私が所属する研究室の演習は、レジメと図表を準備し、OHPで発表を進めていく。私は人前で話すことが大の苦手であったので、皆の注目を浴びる演習の発表ではいつも緊張し、初めから終わりまで手に汗を握った。また、発表中、教官からは図のチェックから発表の展開まで小さな事から大きな事まで、ビシバシと厳しい指摘を受けるので、時には顔面蒼白になりながら発表をしていた。しかし、先生方が本当に忍耐強く練習をさせて下さったお陰で、自分の研究を人に分かりやすく発表する大切さと仕方を学び、今は本当に良かったと心から思う。

修士課程を通して得た物は、よき研究室の仲間と悔しさであった。文系出身の私を研究室の仲間は、本当に快く受け入れてくれた。初めて野外巡検で四国に行った時、自然の中で毎日違う岩石を見、子供が初めて言葉を覚えるように楽しく岩石の名前を覚えていった。ある1日の巡検の行程を終え、疲れて宿に戻りお風呂に入った。その後、1日の復習と明日の予習のゼミを始めるや否や、教官が「風呂の石は見たか、露頭で見るよりも磨いてあって、お湯で濡れているから分かり易かっただろ」と言われた。学生はただ気持ちよくお風呂に入っただけであったので、全く風呂石のことなど気にも留めていなかった。その時は、皆、先生の一言で一気に湯冷めしてしまった。私はこの巡検で、「いつでも、どこでも地球科学が転がっている」ことを知り、「地球科学とはなんて気が抜けない学問なのだろう」と思った。と同時に、さらに地球科学が好きになった。

さて、修士論文作成に入り、今まで汗水流して日夜実験・分析してきたデータを考察する段階に入った。たくさんのデータからなんとかエッセンスを抽出し、自分なりのアイデアを出そうとしたが、いくら頭をひねっても良いアイデアは出てこない。ない頭を何とか絞って考えたのだが、結局時間切れになり先生が考えてしまった。「こんなに面白いことが言えるよ！」と先生に言われた時には、本当に崖から突き落とされたように情けなく、悔しかった。それでも、何とか修士の最終審査までやり、無事に修士課程を終えた。

さて、博士課程への進学はどうしよう？私は、修士課程に入った当初、進学のことなど考える暇もなく、無我夢中で自分のノルマをこなすことに精一杯であった。いざ進学を考える段階になり、修士時代を振り返ると「自分は研究に全く向いていない」と思った。しかし一方、今までの研究はまだ始まったばかりで、ま

だまだとも思った。結局、「ここでやめてしまうのは悔しい」という気持ちだけで進学を決めた。

博士課程で得たものは、研究の面白さの発見と根性・持続力である。博士課程に進学した当初、まだ自分の研究を「面白い！」と確信できなかった。しかし、研究を続ける内に「実は面白いのかな？！」と次第に思い始めた。それが確信となったのは、博士課程２年４月に参加した初めての国際学会での発表であった。私の研究対象地はヒマラヤのカトマンズ盆地である。だから、国内だけでなく、世界の人に自分の研究を発表し、議論してもらう必要があった。参加するように教官に言われた時は、とにかく不安：楽しみが９：１であった。しかし、国際学会のプレ巡検で出会った友人(今でも連絡を取り合っている)と発表後の聴衆の反応とで、自分の研究を「面白い、もっと追求したい！」と思うようになった。そして、何よりも「ずっと地球科学と関わっていきたい！」という気持ちを強くもった。

さて、私の博士課程３年間はネパールと共にあったと言っても過言でない。ネパールで過ごした期間は、すべて合わせると約144日間である。それが長いか短いかは人によって捉え方は違うと思うが、とにかく私にはこのネパールでの滞在は良い経験であった。約１ヶ月にわたるキャンプでの野外調査、学術ボーリング調査とネパールの良き人達との出会い。学術ボーリング調査では、掘削した総計300m以上のボーリングコアを毎日ひたすら記載し、5cm毎に古生物、有機、無機、粘土、古地磁気など目的別に試料を分けて袋に詰める。総計15117個、総重量約１トンの試料を採取し、日本へ発送した。この作業は本当に単調でとにかく根気と持久力がいった。しかし、時にコアから出る美しい葉の化石に感激し、充実した毎日を送ることができた。

博士課程最後の山場は論文執筆であった。まず、英語で論文を書かねばならない。その上、論理的に書かねばならない。本当に頭がおかしくなるのではないかと思う程、苦悩の日々が続いた。指導教官の髪の毛に急に白いものを増やしてしまった時もあった。再び、「自分は研究者には向いてないのではないか」と嘆く時もあった。しかし、「とにかく中途半端でやめたくない！」、最後には「こんな苦悩の日々はいやだ！早く楽になりたい！」という気持ちと根性で乗り切った。また、研究室の教官や友人達の本当に暖かい支援のお陰で博士論文を提出することができた。皆には本当に心から感謝しています。

「自分で選んだ道だから最後までやり遂げる！」という気持ちを持ち続けたことで博士論文を完成できたのではないかと思う。また、その気持ちを持続できたのは、国内外で出会った素敵な先生や仲間、そして自然とのふれあいがあったからだと思う。今は、「なんて研究って終わりが無いのだろう」と実感し、この分野の研究の面白さにはまってしまい、研究発展の為に次の段階へ進む準備をしている私である。

新しい出発

学ぶ立場から教える立場へ

森　　貴子
（国際社会文化専攻）

研究室にて

2001年3月に比較社会文化研究科博士後期課程を単位取得の上退学し、日本学術振興会の特別研究員として一年間研究を進めた後、この4月より愛媛大学教育学部で、社会科教育西洋史を教えることとなった。

愛媛大学教育学部は、愛媛県の中心地である松山市に位置している。松山城を取り囲むように発展したこのまちは、夏目漱石の『坊ちゃん』の舞台となったことでも有名だが、道後温泉や、四国88所霊場のうちの８ヵ寺も擁しており、古い歴史を有する四国最大の都市である。

といっても、私自身こちらに移ってようやく一ヶ月が経とうというところ（2002年４月末現在）。まだまだ松山市の本当の魅力について、解説できるほどの経験も知識もない。日々の生活の中で興味深く感じたのは、言葉遣いが大分県のそれ（私は大分県出身）に似ているものの、イントネーションが関西的だということくらいである（さらに、交通ルールの特徴。赤信号になってからも、しばらくは車が通行すると思った方がよい。自転車に乗っている人などは脇道からの車の飛び出しには要注意。ただ、悪気はないらしい）。それでも、学部４年生の時に、愛媛大学で開催された日本西洋史学会の大会に参加し、その経験が後の研究生活への契機になったことを考えれば、ここ松山市、そして愛媛大学に特別の思い、そして縁を感じていることも事実である。

私は、熊本大学で修士課程を修了し、博士後期課程をこの比較社会文化研究科で過ごした。退学するまでの5年間では、恩師志垣嘉夫先生の突然の死という悲しい出来事にも遭遇したものの、総じて充実した研究生活を送ることができた。研究科での日々を常に支えてくださった科学史の高橋憲一先生には、ラテン語の魅力を深く教えていただいたし、研究科という枠を越えても、様々な先生方のゼミに参加させていただき、勉強の面白さを肌で感じることができた。また、院生同士の交流も活発で、自主ゼミ、読書会などで大いに刺激を受けながら生活できたのである。私の専門はイギリス中世史（ことに、現在までのところ、中世初期＝アングロ・サクソン期農村史を勉強している）だが、専門の枠を越えたこうした知的交流が、翻って自身の研究の幅を広げ、比較史的な観点を与えてくれたことは疑いない。

さて、今年４月からの愛媛大学での毎日は、私にとって、以上のような恵まれた研究生活での学ぶ立場から、教える立場へという大きな転換を意味している。ことに、教育学部で未来の教師たちと接することの責任は、重大なものである。教育環境の悪化が叫ばれている現在にあって、教師、そしてそれを養成する教育学部の担うべき役割は多大なものであるはずである。ところが、大学改変の流れの中では、教育学部はむしろお荷物的な存在で、規模縮小、学生数の減少、複数県での統廃合などが論じられ、大変な困難を迎えている。そこでは、学生たちも、過大な期待と、それとは矛盾するような教育学部不要論のうちで、とまどい、元気をなくしているように見える。彼らが自信をもって社会に、そして教育現場に出ていけるようにしなくてはならない。責任を痛感している毎日である。

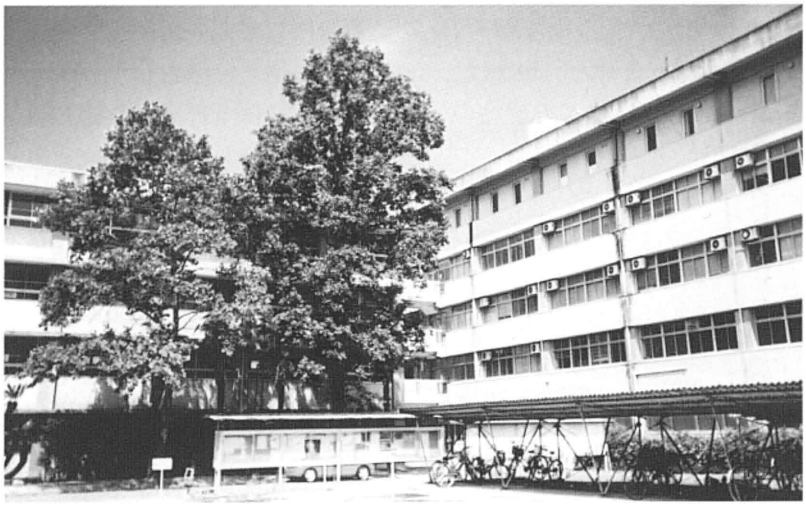
現在私が受け持っているのは、社会科研究演習、外国史I、それに西洋史で卒論を書く予定の学生に対する「自主ゼミ」（教員免許改定の中で、なんと正規のゼミ＝演習は、教育論に関するもの以外は廃止されているのである）が主なものである（慣れるまでは、というご厚意で、前期は講義数が少ない）。経験の少ない私がこんな理想を掲げているのもおこがましいのだが、私の考える教師像は、「物事を深く考えることのできる社会人」である。教師としての技術より何よりもまず、様々な現実の問題を一度自分なりに考え、多様な意見を考慮した上で自身の見解を表明できる。当たり前と見られやすい事象にも、問題を見つけることができる。教師と児童、生徒とのつきあいも、当然人

間同士のそれが基盤となるのであり、だからこそ、まずそうした「まともな」社会人となってほしい。その上で教育技術を身につけることができれば、鬼に金棒、教育のスペシャリストである。自分も含めて、学生たちにそうした教師となってほしいが故に、講義内容もかなり無理をして選んでいる。現在の問題と深く関わるテーマを選択し、それを歴史的にどのように解釈できるか。講義を組み立てていく上で、これをとりあえず今年の基本姿勢としている。具体的には、ユーロ導入を契機として貨幣の意味と役割を見直そうという『貨幣を考える』(社会科研究演習)、自然破壊等身近な問題を歴史的に把握しようという『現在社会に生きるわれわれと西洋の歴史』(外国史I)、そして後期には、農業問題、世界システム形成史、中世の生活史なども予定している。

このように意気込みだけはあるのだが、何といっても多くが私の専門であるイギリス中世農村史とはかけ離れたテーマ。毎回講義の準備のたびに、「今度こそできないかもしれない」、「ねたがない」、「うまく落ちがつけられない」と悩むことしきりである。さらに、非常勤講師の経験もない私には、多くの学生の前で話すということ自体に緊張の連続で、学生の反応をきちんと見る余裕もないというのが、現実である(学生の意見では、私はどうも早口らしい。講義も早く終わり気味。90分持たせられるように、ゆっくりはなさなくては。反省、反省)。また、教育以外でも、教授会、教室会議、各種委員会会議(私はいきなり社会科の総務委員になってしまいました)への出席、書類作成等々、こなさなければならない仕事は多く、講義の準備に専念できる時間も少ない。とにかく、環境に慣れ、仕事のペースをつかむまでは、この忙しく緊張した毎日を続けるしかないと、覚悟(観念?)しているところである(自身の研究ができるようになるのはいつの日のことか。こんなことで、博士論文が書けるのでしょうか)。

それでも、学生との付き合いは、楽しいことも多い。西洋史に興味を持ってくれる学生も多いし、ゼミ生は意欲も十分にある。私の専門を聞きつけて、ラテン語を一緒に読みたいという学生まで現れた(嬉しい悲鳴)。私自身も学部生であったのはそう遠い昔のことではないし、懐かしく、学生に対する愛着もある。大学生はだめになったといわれ続けて久しいが(私の時も言われた)、まだまだ勉強したいという学生はいるものだ。自身が、学問的にも刺激的で、親身になってくださった様々な先生方との出会いの中で、研究を続け、大学に長く居座っていたことを考えれば、今度は自分が学生との付き合いの中で、できるだけのことをしていかなければなるまい。

先述したように、大学法人化の流れの中で、教育学部の直面している問題は深刻だ。愛媛大学教育学部でも、たびたび会議が開かれ、議論が続けられている。話には聞いていたが、実際に教育学部に就職するまで、ここまで大変な事態だと実感していなかった。先行きは明るくない、と言うのが正直な感想だ。また、教育内容も、教員免許の関係で各教科専門の単位が削られ、教育論・技術論に偏重したものとなってしまっている。このような状況下で、西洋史を教えるのはいろいろな意味で困難もあるが、縁あって出会った学生たちのためにも、尽力していかなければ、と考えている。初心忘るべからず、ですよね。



愛媛大学教育学部本館

楽しく苦しい大学院生活－今後への心構えとして－

北　　美幸
（国際社会文化専攻）

皆さん、こんにちは。このたび北九州市立大学外国語学部国際関係学科に専任講師として着任しました北美幸と申します。まだ就職して３週間半、授業が始まって２週間ちょっとですので、あまりまとまったことも申し上げられないのですが、まずは、無事に４月１日に辞令を頂いて、大学教員としての第一歩を踏み出しましたことを今まで長い間お世話になった先生方、院生の皆さんにご報告申し上げたいと思います。

北九州市立大学の北方（きたがた）キャンパスは、北九州モノレールの競馬場前駅からすぐのところにあり、外国語学部、経済学部、文学部、法学部から成る一学年が1,300人ほどのこじんまりとしたところです。昨年４月に理工系の国際環境工学部の新しいキャンパスが若松区ひびきのにできたのですが、残念ながら、私はまだそちらには伺ったことがありません。現在は、ガラス張りのエレベーターがついた13階建ての建物の５階に研究室を頂いて、自衛隊の基地と小倉競馬場（!）を眺めながら仕事をしています。

今年度は、３年生、４年生それぞれの演習（ゼミ）のほか、「アメリカの社会」、「地域研究入門（アメリカ）」などのいくつかの専門教育科目を担当しています。授業を始めてみて、予想していたことではありますが、改めて自らが学生としてゼミに参加していたころは如何に気楽だったかを痛感しています。内容を十分に理解していないと「教える」ことができないのはもちろんですが、どの科目で何を教えるのか、何という教科書を使うのか、一回ごとの授業で進むペースの配分、どういう課題や試験を課すのか、そして、これらを行えば、セメスターが終わるときには、きちんと授業を受けた学生ならば○○という科目について十分な知識と理解を得た状態になるのだろうかと、「わかりやすい教え方」や「授業の進め方」についても日々考えてしまいます。

これまで大学で講義をした経験がなかったため、このような未熟さゆえの戸惑いや悩みを感じてはいますが、学生の側からすれば、いくら不慣れな教員に当たったからといって、ある科目について学ぶのも一学期限り、ゼミに参加するのも３、４年生の２年間限りであり、細かく言えば、例えばアメリカの社会におけるエスニック・グループの統合や同化の類型には３つのタイプがあり、それぞれが何であるかを聞く機会は一回限りであると考えれば、私が首尾よく授業をできるようになった頃に再び受講してもらうという訳にもいかないのですから、まさに一期一会だなと責任の重さを感じます。しかし逆の方面から見て、学生が単位を取ることや試験対策ばかりに気をとられずに、内容そのものに対しての興味を持って主体的に勉強してもらえるような授業にしたいという思いもあり、ますます混乱しそうです。とはいっても、もともと外国語大学だったということもあり外国語学部には真面目で勉強熱心な学生が多く、また、学科の先生方からもとても親切にして頂いていますので、あとは私自身の問題だと肝に銘じて努力していきたいと思います。

比文には全部で７年間在籍していましたが、学生としてパンフレットに書いてある学際性うんぬんの研究科の特色以前に、学部を卒業してからの私の20代の殆どを過ごした時間と場所として、とても幸せな環境だったと思います。私は一昨年のアメリカ留学中に精神的なストレスから体調を崩してしまい、帰国後も随分長い間に亙って食事も取れないようになってしまいました。自分の研究どころかろくに授業のテキストも読まず、割り当てられた授業のレジュメを発表の前の晩にバタバタと徹夜して作るのが精一杯になり、自分の家からほとんど出ることもできずに毎日泣いてばかり

いました。そんな生活をしばらく続けて、一時はかなりひどい状態になっていましたが、あるとき、何かのきっかけで院生の談話室（博士部屋）で友人たちとおしゃべりしたら少し気が晴れたのです。その後は、誰か話し相手いないかなあ、と博士部屋を訪れるようになったのですが、私の状態を知って体調を気づかう言葉をかけてもらったり、そうでなくても一緒に食事したり何気ない雑談をしたりするうちに、あるいは先生方も就職や論文のことを含めて本当に親身になって下さったこともあって、受け入れてもらえた嬉しさで私はいつの間にか留学前の元気を取り戻すことが出来ました。振り返ってみると、私には比文での日々は宝物のようです。

もちろん、論文の書き方について先輩方にアドバイスを頂いたり、学問分野の違う友人たちとも話をできたりと、研究の面で得られたこともたくさんありますが、同じ学年の友人たちと励ましあって修士論文を完成させたり、一緒にゼミ旅行に行ったり飲み明かして語り合ったりという院生同士の仲のよさや、新しい研究科をよりよい雰囲気のものにしようという先生方の熱意には、比文独特のものを感じます。日本の他の大学院の様子は私には分かりませんが、ドライで個人主義的なアメリカの大学院を経験してみると、大げさでなく他の研究科に行っていたら今の自分はなかったような気がしています。

私達の研究は、理系のようにチームを作って実験をしたりする訳ではない以上、一人でパソコンに向かったりの作業をする時間もどうしても長くなりますし、海外等での調査も当然一人で行うことが多く、すべてが自己責任の世界ではありますが、甘えが許されない、というより甘えようもない部分が多いように思います。個人個人の研究や作業はあくまでも自分自身がやるしかないにせよ、スランプに陥ったときや孤独感を感じたとき、あるいは研究をすること自体への迷いや思い等、なんでも話しあえる友達を持てるということは、私にとって、これまで院生生活を続けるうえでとても心強いものでした。

このようなことをすべて含めて、比文での生活にはとても充実や満足を感じていますので、「子を持って知る親の恩」ではないですが、だからこそ、北九大での私の学生たちにも「いい学生生活だった」と思ってもらえるようにしたいと思っています。もっとも、学生にとっては、（学部時代の私が非常に怠惰な学生だったように！）サークル活動やアルバイトの方が楽しいし大切なのかも知れませんが･･･。

また研究の面でも、今後は教育の仕事が加わり新しい段階に入った感じはしますが、目指すものはこの先も変わらないと思います。論文がまとまらないときの七転八倒の苦しみや読んでも読んでも減らない資料の山にうんざりすること97％と、探していた珍しい史料を見つけてコピー機のところに運ぶときと論文の抜き刷りが出来上がったときの小さな喜び３％で、こつこつとやっていきたいと思います。そして、もっと大きなレベルで言えば、これからもずっと「知りたい」という欲求と熱意を失うことなく、人間として成長したいと思っております。

以上、まだ仕事を始めたばかりで、とても院生の皆さんのお役に立てるようなことやアドバイスになるようなことは何も書けませんし、それどころかこれから先もくじけてしまうかも知れませんが、ひとことお礼申し上げたく御挨拶に代えさせていただきます。

九州経済産業局への就職

樋　口　一　郎
（国際社会文化専攻）

私は2002年３月に比較社会文化学府国際社会文化専攻を修了し、同年４月１日付で経済産業省九州経済産業局に入局した。同局は現在、九州地域のコーディネイター、シンクタンクとして九州地域の経済産業の実態把握に努め、世界に通用する地域産業・企業の発展をめざした戦略的なプロジェクトの推進を図り、地域産業の自立的発展を支援することをその任務としている。簡単にいえば、同局は経済産業省の地方部局として、現場のニーズに根ざした地方経済活性化のための施策を執り行う機関であるといえる。このように国家機関としてスケールの大きい目標を掲げている同局だが、現段階で私が局の仕事の全貌を語るのは不可能に近いので、今稿では就職活動中の経験を中心に紹介し、続いて簡単な現況報告をしたい。

そもそもわたしが公務員という仕事を志したのは、「国民生活への奉仕」という身近な課題を常に念頭に置きながら職務を遂行できる点に大きな魅力、やりがいを感じたからであり、また例えば「九州経済の活性化」という一つのテーマを人生の中の広いタイムスパンで追求・考察していく仕事のスタイルが、自分のマイペースな性格と合致しているのではないかと考えたのも志望の理由であった。

そのような意識を持ちながらも、修士１年の秋までは、各種勉強会に参加したり、ボランティア活動に手を出したりと、多方面参加型の比較的自由な生活を送っていた。しかしその後、ある資格学校の説明会に行った際、現在の公務員受験競争の激しさについて、脅しに近いような説明を受け、早速勉強を開始した。この後約１年間が院と公務員受験の両立期となり、精神的に最も負担の大きく辛い時期となった。院での個別発表や論文執筆作業と並行して公務員受験のための教養・専門分野の学習を行うといった毎日が続き、そのような二足わらじでの学生生活に当たっては、下手をするとどちらにも十分に力を注ぐことができない恐れがあるという懸念が常につきまとった。しかし幸い、院の同輩も私の公務員受験に協力してくれ、発表の調整を快く引き受けてくれたり、勉強方法や面接の相談にも積極的に 乗ってくれ、私の負担を軽減してくれた。

このように周囲の協力にも支えられながら乗り越えた１年間だったが、そのスケジュールを簡単に紹介すると、修士１年時の11～３月は受験科目の基礎的な演習を一通りこなし、４月～６月の３か月は、ほぼ毎日研究室に足を運び、受験勉強を続けた。そして７月第１週の一次試験（筆記）、同月半ばの１次試験合格発表、８月上旬の官庁説明会及び２次試験（面接）に臨み、それと並行して行われる官庁訪問に明け暮れた。

机に向かっての勉強もさることながら、１次試験合格後に待っていた官庁訪問は、日々体力的にも精神的にも身を削られるような苦しい経験であった。これは各省庁の中から部局を選択し、各々予約を入れた上で訪問して業務説明を受けたり質問を行ったりする、２次試験合格発表前の志望官庁への挨拶回りのような活動である。受験当初、この官庁訪問は単に儀礼的なものであると軽く考えていたが、実際体験してみると、この訪問が内定先を左右する重要なものであることに気づいた。官庁訪問の内容は省庁によってまちまちだが、多くの所で積極的な質問姿勢が必要とされ、テーマを与えられ、集団討論が行われたところさえあった。実質的にペーパー試験の比重が高いとばかり思っていた私は、自分を各省庁に売り込むことの必要性をまざまざと感じた。しかし今考えてみれば、この時期に開き直って「それならできるだけ多くの省庁を試してみようじゃないか」という姿勢で官庁訪問に望んだことがプラスに働き、私は積極的に官庁訪問をこなすことができたし、自分のやりたいことの再確認という貴重な経験もできたと思う。実際、私は文部科学省、厚生労働省、総務省、国土交通省など、経済産業省以外にも幅広い省庁を訪問した。限られた時間の間にこれらの省庁を訪問し、且つそれぞれの職務について事前勉強をしておく必要があったので、当然過酷なスケジュールとなった。昼間はスーツ姿で駆け回り、夜はインターネットやパンフレットを使って遅くまで予習するという日々が、約１ヶ月続いた。しかし、この短期間に官庁訪問だけに集中したおかげで、人前で自己アピールするのが苦手だった自分が、人前でものを言うことに以前ほど抵抗がなくなったのは驚きであった。また、従来関心があまりなかった省庁をも敢えて訪問することによ

って、自分が公務員の仕事というものを今まで如何に主観的、一面的に狭い視野で捉えていたかということを確認することができ、訪問先によっては話を聞いた結果、これまでの省庁観が変わった所さえあった。実際、経済産業局の仕事内容について面白いとは思っていたものの、学生時代に政治・法律分野を専攻してきたこともあり、経済分野の仕事には苦手意識・距離感を持っていた。しかし、面接担当者の方と大変話が合い、同局が九州経済活性化のために幅広い取り組みを行っていること、その内容が型にはまった公務員的でなく、個人のアイデアが重視されるなど柔軟な側面が強いことなどに強く惹かれて同局を志望するに至った。私のこれらの経験に教訓があるとすれば、自分がやりたいことについて自分が少しでも興味を感じることはとことん突き詰めて調べるべきであるし、興味が感じられなさそうな分野でも主観的な思いこみで物事を捉えてはいないか、今一度考え直してみるべきだといったことであろうか。先入観をすべて捨てて頭を一度リセットした上で志望先を訪問し、いったんは素直に話を聞いてみること。これは出来そうで出来ないことだと思う。また、体力勝負で苦しかった官庁訪問の経験によって他にも貴重な経験を数多くすることができた。例えば、九大の大学院係の職員の方々に一職員として大学行政・職場環境について本音で語っていただいたり、地元直方のハローワークを個人的に訪問し、中央局では聞けなかったような地域の雇用状況、それに関連する地域特有の問題点について所長自ら熱心に説明していただく機会を得たりしたことは、今後経済産業局の一員としての道を歩む自分にとっても共通の関心事項となりうる大変貴重な経験であった。また、官庁訪問を通してたくさんの同世代の交友関係ができ、同期の横の繋がりをつくることもできた。彼（女）らとは今でも時折お互いの仕事について意見交換することがあり、縦割りの世界にこもりがちなこの仕事を広い視野を持って考える機会を得ているともいえる。

官庁訪問を通して、就職活動に当たって最も重要なのは知識ではなく情熱であるということも実感できた。大学院ではアジア太平洋の国際関係に関心があり国際関係論のゼミに所属していたため、訪問後は経済産業局でも国際部の仕事に関心を持ち、経済的な国際交流の場に立ち会いたいという希望を強く持っていたが、前述のように経済の分野となるとほとんど知識がない私は官庁訪問における面接の中でも専門的な事項には何一つ触れなかった。それでも経済局に就職を志望する、その中でも九州地域の国際化に関心があるのだという勢いだけはあったように思う。その訳の分からない勢いで最終的に内定が勝ち取れたのだから、就職活動は、結局はその人のやる気にかかっているのだと思う。

４月１日をもって国際部投資交流促進課に配属されることになった私は、この原稿を書いている現在、東京での新人研修を終え、ようやく一般業務に就いたばかりの状況である。念願の国際部配属で当初舞い上がり気味だったが、仕事の説明を受ける度にその大変さに圧倒されている。同課は地方自治体や経済団体と協力して、国内外の投資の促進、海外との産業交流、外資系企業の誘致を主な業務としている。具体的に現在は、九州経済国際化推進機構という、自治体・経済団体から成る、九州と海外諸国との経済交流を目的とする団体の事務局として、次期会合に向けた準備作業を行っているところだが、その中で現在の私はまだ業務全体について考える余裕など全くないと言ってもよいほどである。しかし周りの多くの先輩からは常々、「おかしいと感じたことはいつでも言うべきだ」とのアドバイスをいただき、ここが風通しのよい職場であることを身をもって実感している。また、先日初めて部内の会議に参加したが、若手の職員も上司と対等に自由な発想に基づく活発な討論を展開しており、自分も早くこのような場で発言できるようになりたいと決意させられた。他にも、入局１か月目にして地域産業活性化に関するセミナーにも出席する機会をいただき、局では味わえないような企業経営者達の生の声を受け止めることができた。

極端にいえばここは、意思さえ伝えれば、やりたいことを何でもさせてもらえる職場ではないかと思う。また、現在、投資先としての中国の躍進など、国際情勢は常に流動的であり、業務も当然、常に九州経済発展のために望ましい方向にシフトさせていく必要がある。ここはいい意味での緊張感を保てる職場だと思う。大変さに付随するやりがいの大きさに圧倒されてもいる毎日だが、この職場を選んで本当に良かったと思っている。

最後に、今後の抱負として、自分の所管業務にしか関心を持たないような組織の中の一歯車になりきってしまわないような心構えを持ちつづけることを挙げておく。意識を強く持っていなければ、日々業務に忙殺され個別業務のことしか考えられなくなるのは公務員も同じだと思う。常に大局的な局の役割の中に自分の小さな仕事を位置づけていくこと。このことが国民と身近な行政の出発点であるように思う。

ロンドンでの二年間

溝　口　孝　司
（基層構造講座）

ロンドンは、緑したたる、しかし、とてもほこりっぽい街である。私が二年間を過ごさせていただいたロンドン大学考古学研究所（The Institute of Archaeology）の所在する、いわゆるブルームズベリーの界隈も、トッテナム・コート・ロードのあたりまでゆくと、風の強い日には、目が痛くなったり、頭がじゃりじゃりなってしまうくらいほこりっぽかった。ロンドンの交通システムは老朽化著しく（もう何十年くらい老朽化著しいのだろうか？）、チューブ（地下鉄）はしばしばストップし、ラッシュ・アワーの道路は駐車場と化している。しかし、一歩スクウェア（Squares）に足を踏み入れると、亭々とそびえる木々に四方を囲まれた空間には手入れのゆきとどいた芝生が広がり、リスが遊び、人々はそれぞれのひとときを思い思いに楽しむ世界がひろがる。ブルームズベリーの界隈は、Russell Squareをはじめ、殊にスクエアが多いので、夏には街区の切れ目ごとにスクエアの木々の緑がもりもりと顔をのぞかせて、どこかの森の中にでもいるような気分になる。

ラッセル・スクウェアにて。考古学研究所からの帰途。

ほこりっぽさと、信じられないようにみずみずしい緑。このいささか奇妙なコントラストは、しかめっつらをして文句ばかりいっているひとびとと、その同じひとびとが知っている日々の楽しみ方のコントラストとも重なる。街を笑顔で歩いているのはたいてい観光客であると知るのに、さほどの時間はかからない。ロンドン人は、世界の苦痛に一人耐えるかのごとく、少しうつむいて足早に歩いてゆく。初夏の長い長い夕暮れ、パブから歩道にあふれだしたひとびとが、パイント・グラスでビターをちびちびと楽しむときに浮かべるしんから幸せそうな笑顔が、その同じひとびとが浮かべる表情であるとは、にわかには信じがたい。

考古学研究所での研究・教育生活は、明けても暮れても議論、議論、また議論だった。学生との議論、同僚との議論、所長との議論・・・。議論が、それが起こる時と場所以外でのコミュニケーションと無関係、ないしはネガティブな関連性をもたないという約束（ないしは共通認識／幻想）がない限り、お互いとてもやってられるものではない（と〈日本では〉観念されるような）タイプの激しい議論も、学問的なものから、いわゆる世間話が嵩じてといった類いのものまで含めて、よくやった。下手な言葉のせいでやりこめられた、という思いがして、その一瞬後には、議論にまけたことの理由をそんなことに見出す自分にたいする苦い感情がこみあげてきて、なんともつらい気分に沈むこともあった、と正直に告白するしかない。それでも、上で言ったような約束があるから／それを前提にできるから、ネガティブな気分に苦しめられる時間が長引くことはなかった。そんな議論を、研究者としての同僚とだけではなく、講義やゼミをとってくれた学生達とも熾烈にやって、そして、次の機会には、前の議論を忘れてまた別の議論をふっかけあったり、パブのカウンターで共にパイント・グラスをかたむけたりしていたのだから、タフで騒がしい、とにかく「楽しかった」日々のイメージが自分のなかに刻まれていることの理由はよくわかる。

議論して、わすれて、また議論して、というサイクルと、それが内包するコントラストのリズムは、「いろいろいいたいことはあるけど、まあ、やってみたら」、という気分、ロンドンや、昔過ごしたケンブリッジでも、空気のようにただよっていたその気分と、自分のなかで重なる。それは、「いろいろいいたいことがあるけど、いわない。でも、やめとけば」、という気分からは、本当に、本当に、遠い。大英博物館の中庭に屋根をかけて、なんとも軽やかで気持ちの良い空間を

つくってしまう、その一方で、崩壊「しっぱなし」の交通システムや、その他もろもろの問題になすすべをもたないひとびとと、そのひとびとが生きてみせるコントラスト。そのコントラストがその存在の前提とする、幾重にも錯層する残酷なコントラスト。時空間を横切り重層して引かれ続ける、そのようなコントラストの社会性と歴史性について省みることなく、「それでも何かを生みだし続けるロンドン／イギリス」をたたえたり、あこがれたりすることの無責任と、そのしばしばharmfulな帰結については、すでに語り尽くされている。では、ピストルズやクラッシュやストラングラーズを今でも聞くけれども、エルガーのチェロ・コンチェルトもいいなと思ったりするようなタイプの人間は、いったいどうすればよいのだろう？イギリスの救いがたい過去と救いがたく結びついているたぐいのcultural itemsに、奇妙な親近感をいだくようなところまでイギリスにひたってしまった僕は、どうすればよいのだろうか。セミナー・ルームで、パブで、時にはスクウェアで、考え込んでしまう問題だった。

たしかに僕は、英語で著述をするときに、他の何ものでもなく、〈英国人〉のように書き、話したいと願い、そのようにしようとしてきた、そのことに気付く。奇妙で痛々しいミミクリ（擬態）といわれるのかもしれないが、自分というものが、自分が愛してきた人たちやものたちの記憶の複合であると、ある一面で言えるとすれば、僕はそのことをどうにか受け入れて、自分なりにやってゆくしかないのだろう。あたりまえのことなのだ。そのような意味で、僕のなかに刻み込まれた、ロンドンで過ごした二年間とどのようにつきあってゆくのか、僕なりに考え、行動しようとしている。すでに形になったものもあるが、ここは、これについて語るべき場ではない。

当初、一年間ということでお認めいただいた研修期間の、二年間への延長をお許しいただいたばかりでなく、さまざまなご迷惑をおかけした先生方に、この場をかりて、お詫びとお礼を申し上げます。

ストーンヘンジ近傍・夏。エルガーを想いださせるrural Englandのただ中にて。

深海掘削計画第199次航海と古海洋研究

西　　弘　嗣
（地球自然環境講座）

ジョイディス・レゾルーション号の勇姿

深海掘削計画（Deep Sea Drilling Project: DSDP）は、未知の世界として残されている深海底を先端技術の粋を尽くして掘削し、そこにある海底の堆積物や岩石を直接手にとって調べようとする国際協力事業である。この計画は1968年に開始された。最初の４年間に費やされた金額は、約2500万ドルであったが、プレートテクトニクスを証明するなど、1970年代の地球科学に革命を起こした。最近では一件あたり約5000万ドルと拡大され、最近の14年間では合計5億ドル以上も投資されている巨大プロジェクトである。

掘削は石油掘削船を改造して行われている。最初は、グロマー・チャレンジャー（Glomar Challenger）号という名の船が使われていたが、老朽化のため廃船となり、1985年から現在のJOIDES Resolution（ジョイディス・レゾルーション）号が就航している。DSDPでは、第１次から44次にわたる航海が行われた。その後、IPOD（International Phase of Ocean Drilling、第45～96次航海）、ODP（Ocean Drilling Program、第100次航海以降）と名前を変えて計画は続けられ、現在第201次航海が進行中である。そして、2003年度の210次航海でODP は終了となる。こうしてみると、深海掘削はDSDP 以来何と30年の長きにわたって続けられており、このような長期にわたる国際協力事業は例をみないであろう。今後、深海掘削はOD21と名付けられた新計画へ移行することになっている。この新しい計画では、同時に３台の掘削船を運行するなど、さらなる計画の拡大が行われる。日本でも、海底下7000mまで掘削できる新造船「ちきゅう」（排水トン57500トン、戦艦「長門」よりも大きい！）を建造・運行し、大きな役割を担うことになっている。尚、「ちきゅう号」は、１月18日に無事進水式を終了し、現在の予定では2007年に就航予定である。国際深海掘削計画については、http://www-odp.tamu.edu（国際ODP本部）、http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/~odpjapan/（ODP日本事務局）、OD21計画についてはhttp://www.jamstec.go.jp/jamstec-j/odinfo/のホームページをご覧いただきたい。

さて、筆者は、2001年の10月23日から12月16日まで、この深海掘削計画の第199次航海に参加した。掘削船（前述のJOIDES Resolution号）といっても全長143m、幅21m、排水トン数18600トンもあり、後部にはヘリポートも装備している。ちなみに、日本連合艦隊の戦艦が約３万～４万トン、重巡洋艦が8700～14000トン程度であったから、重巡洋艦なみのサイズといえる。内部には、掘削したコアの処理および観察室、古地磁気測定室、微化石研究室、化学実験室など陸上と同じような実験室が完備され、シャワー、図書館、コンピューター室、映画鑑賞室、運動するためのジムなどもある。また、日常生活においては、食事は一日４回（約６時間おき）、昼と夜の３時にはクッキーが用意されている。コーヒーなどの飲み物やアイスクリームは24時間利用できる。掃除、洗濯は船員がやってくれるので、研究者は研究のみを行えばよい。すなわち、船そのものが一つの工場であり、研究所であり、アパートであるわけである。通常、一航海２ヶ月とされている。現在では、メールが通じているので陸上との交信はずいぶんと楽になった。

筆者が初めて掘削航海に参加したのは、第135次航海（1990年12月27日から1991年２月28日）で、山形大学に助手で在籍していた頃であった。これが最初の海外出張であり、いきなり英語の中に２ヶ月間放置され、ずいぶんと緊張した記憶がある。それに比べると今回は老成したこともあり、何のプレッシャーもなく、航海を終え帰国した。前回の航海では、帰国後に８キロの大減量を行わなければならないほど太ってしまった

が、今回も少し太ったと言われ心が痛んでいる。前回は、フィージーからハワイへの航路であったが、今回はハワイから出航し、ハワイへ寄港するという“おいしいコース”をたどった。世界中から28人の研究者が参加し、日本からは３人（研究者２人、技術者１人）であった。

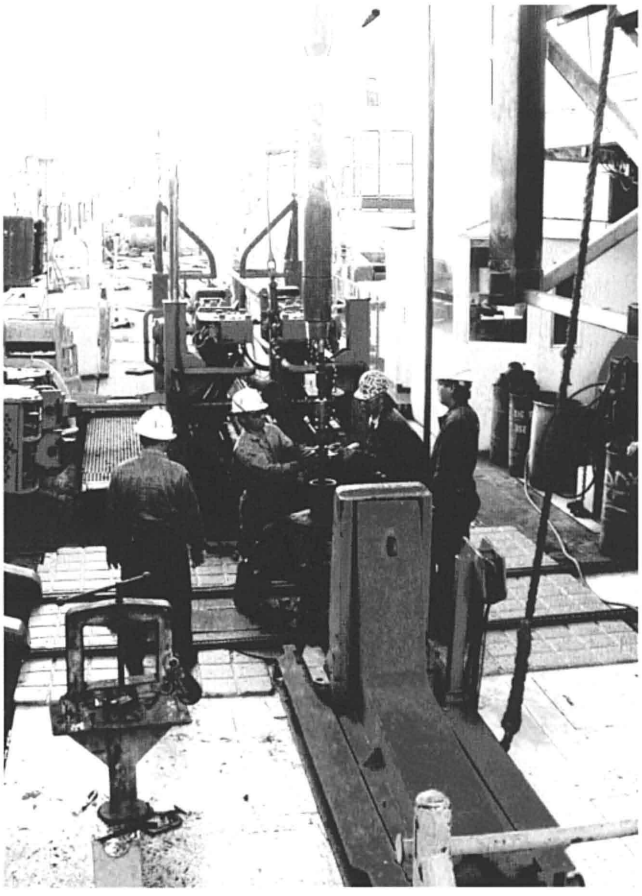
コアを掘るためのドリルビット

さて、掘削地点はハワイ島の東側に広がる水深4000から5000mの海底で、西経130～160度、北緯０～30度にわたる海域（ほとんど赤道近く）である。ハワイ沖はやや波が荒く、掘削地点に到着するまで、ほとんどの研究者が船酔い状態となり、酔い止めの薬（日本では麻薬の一種）を耳の後ろに貼ったり、部屋から出てこなくなったりしていた。筆者も少し気分が悪くなったが、たいしたことはなかった。

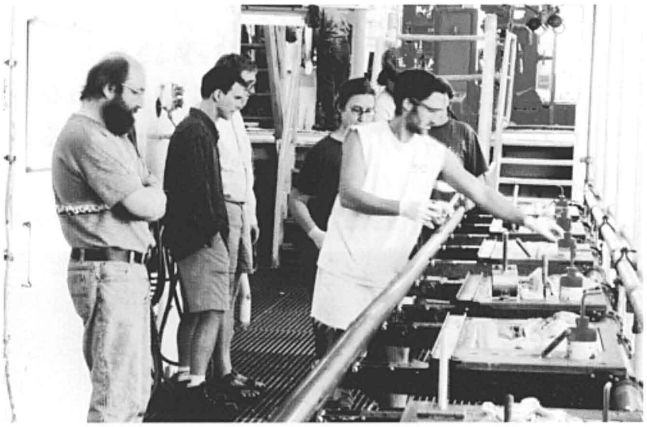
掘削地点に到着すると、船はドリルビットのついたパイプを深海5000m付近の海底面まで降ろし始めた。そこから掘削を開始し、数十mから数百mまで堀り抜いてからパイプを引き上げるので、最初のコアが船上に上がってくるのは、約半日近くを要したように思う。研究者が作業する時間は、12時間交代制となっている。筆者の勤務時間は昼の12時から夜の12時まで、もう一人の日本人研究者（野村律夫教授、島根大学教育学部）とは部屋も働く時間も同じであった。

深海の５千メートル近い深さになると水温も0℃近くなり、船上にあがってくるコアはいずれも冷たい。まず、最初にデッキで1.5mの長さに切断し、物性や電気伝導度などの物理学的な性質を調べる。その後、半分に切断し、肉眼による観察や記載を行い、古地磁気（地球磁場の変化）を測定する。このとき、同時に堆積物の中に含まれる微化石（顕微鏡サイズの化石）や水の化学組成なども調べる。特に、微化石の調査は重要で、これによって地質時代（何千万年前に堆積したのか）を決定する。コアが船上に回収されて後、これらの作業を１時間くらいで行わなければならない。そのため、次々とコアが上がってくるようになると、結構忙しくなる。

今回の航海では、1215地点から1222地点までの８地点を掘削した。回収したコアの長さを全部合わせると、約1300m近くの長さに達する。一地点の掘削が終了するたびに、ミーティングがあり、その後英語の成果報告を作成する作業がある。すべての掘削が終了した時点で、さらに総括論文をつくり始め、下船時には航海の報告論文集を完成させなくてはならない。したがって、航海の最後一週間はとても忙しく、睡眠時間も少なくなる。この間、下船後研究するための試料採取も行わなければならない。Co-Chiefと呼ばれる２人の責任者は、さらに忙しく、見いだされた成果をリアルタイムでODP本部へ報告しなければならない。その成果は航海中にインターネットで世界中に流されている。筆者らの作業している写真も、この間ネットで流されていたらしい。



コアを掘っている作業現場。この写真にある長いパイプが深海底まで降りて行く。その先にドリルビットがついている。



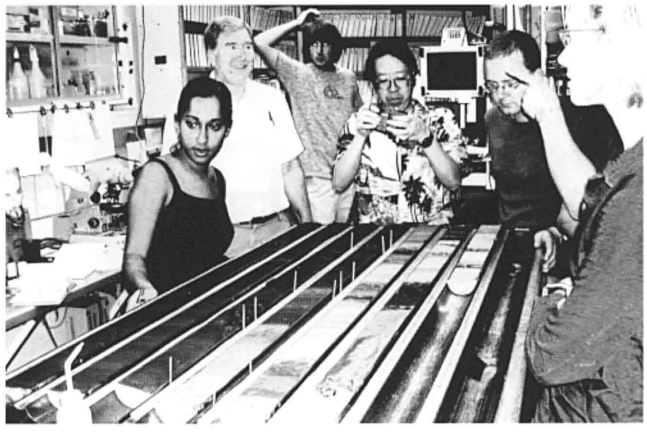
船上に上がってきたコア

船の中では、日本からのE-mailさえ見なければ隔離状態となるので、研究三昧の環境となり、研究者としてはきわめて良好な状態となる。その分、大学に帰った時は一種の「浦島太郎状態」となり、社会復帰に時間がかかるのも事実である。しかし、海外の研究者と好きなときに議論し、意見を戦わせる快感は何物にも代え難い。今回の航海には、筆者の友人が２人参加しており、大いに楽しめた。

約5500万年前（暁新世と始新世という２つの時代の境界付近）は、恐竜が闊歩していた白亜紀と同様に、地球環境は著しく温暖化したことが知られている。当時の北極や南極には氷床はなく、北緯40～45度付近（日本では北海道くらいの緯度）まで熱帯雨林が広がっていた。また、現在２℃程度しかない深海底の水温が11～17℃近くあったと推定している研究もある。今回の航海の最も大きな成果は、この温暖化した時期の堆積物がほぼ連続的に得られたことにある。試料は、1220地点（水深5217m）の海底から約200m掘り進んだ深度と、1221地点（水深5175m）の海底下約150mの深度の２カ所から見つかった。

この時期の地球温暖化の原因として、「ガスハイドレート仮説」が提唱されている。ガスハイドレートとは、地中に含まれているガスが固形化（氷となる）したもので、このうち、メタンからなるメタンハイドレートは、石油に変わる次世代の燃料として注目を浴びている。その存在量は化石燃料の全量にほぼ匹敵し、日本でも今後数年間かけて採掘ができるかどうかの研究が、経済産業省主導で行われることになっている。「ガスハイドレート仮説」では、ガスハイドレートが何らかの原因で溶解し、二酸化炭素よりも効果的な温暖化ガスであるメタンが多量に噴出したため、温暖化が一時的に急速に進行したとする仮説である。今後、掘削された試料を用いて、地球が温暖化した原因がこの仮説で説明できるのか、なぜガスハイドレートが噴出したのか、その時期の地球の環境はどのような状態にあったのかなど、参加した研究者と共同で明らかにすることになっている。

さすがに、２ヶ月間も大海原ばかり眺めて、常に船に揺られている生活をしていると、陸地が恋しくなる。航海中は島もなく行き交う船に会うこともない。ときおり、渡り鳥が船のマストで休んでいたり、シーラと呼ばれる大きな魚が泳いでいるのが見られるだけである。赤道直下は天気が悪く、常にどんよりと曇っている状態であり、夜も星はあまり見えない。ただし、日の出・日の入りだけは見事なまでに美しい。そのような比較的単調な眺めなので、ハワイの明かりが見え始め、朝になり島の姿をはっきりと捉えたときには少し落ち着いたような気分になった。ダイヤモンド・ヘッドを横切り、アラアモアナ・タワーという観光地に比較的近い埠頭に着岸した。航海後は、一日だけハワイに滞在し帰国の途に着いたのであった。



コアの観察をしている筆者たち。半分に切ったコアを観察する。

見えないものとともに生きる―インドネシアから―

佐々木　拓雄
（国際社会文化専攻）

1997年９月から約３年半、政治を広く学ぶ目的で、インドネシア・ジャワ島のジョクジャカルタという町に住んだ。きわめて私事で恐縮だが、その間のある時期、私はある女性に猛烈な恋をした。その女性の詳細には触れないことにしているし、猛烈というのが何を表わすのかも説明しにくい。ともかくも、その猛烈さが、私自身のなかに何かと不都合を生んでいた。

そんなあるとき、私の様子がよほど変だったのか、事情を知るべくもない雑貨屋の主人に呪術師に会ってみないかと言われた。後で知ったのだが、その呪術師はジャワ島きってという評判の呪術師だった。雑貨屋につき添われ、私は呪術師の自宅を訪ねた。平日の夕暮れだったが先客が数組あり、妙な心持ちで１時間ほど待った。やがて客間に通され、呪術師と会った。

呪術師は、ジャワの人格者が常にそうであるように、落ち着いた口調の、いかにもどっしりとした感じの人物だった。私は事情を述べた後、用意していた彼女の写真を見せた。呪術師は数言返し、私の「治療」に入った。「治療」は、手のひらを首筋にあて高温度の何かを発するもので、３分ほどして呪術師の手が離れた瞬間、私は驚くほど気が楽になり始めるのを感じた。

呪術師によると、私は彼女の企みでいわゆる黒魔術にかかっており、症状も軽くなかった。そして、それを克服するためには彼女と別れるしかないというのが呪術師の助言だった。かくして２日後、私は別の理由を言って彼女に別れを告げた。「治療」の効果とは別に、彼女を思う気持ちは依然としてあったし、つらい経験であることに変わりはなかったのだが。

私には、以前から世話になっている路地裏の家族がいた。そこに戻ると、皆の前で、起きたことすべてを話した。今となっては驚くことではないのだが、皆はすべてをいとも簡単に理解した。それどころか、私が彼女とつき合う間、「かかっている」というのが彼らの内での評価だったらしい。ならばなぜ言ってくれなかったのかとも思ったが、それは愚問であった。「かかっている」か否かというのは立証できるものではない。彼らとしては、いずれにしてもなるようになる／なるようにしかならないのだった。

彼女との交際とその顛末が私にあたえた影響は大きかった。見回すと、世の中のすべてが遠大で交錯した論理のもとで動いているようだった。たとえば、誰かと誰かが恋に落ちたとする。２人の行動が明らかでないほど、その「恋」についての見方は様々である。２人のどちらかが黒魔術師の所に出かけたのかもしれないし、そうではないかもしれない。別の例で、現地には、生年月日を容易に明かさない、出された飲み物をすぐに口にしないなどの習慣がある。それは、黒魔術のための情報をあたえない、コップの水を使った普通の人にでもできそうな魔術にかからないための習慣でもありえた。私は、実は以前から目の前にあった新しい言葉と思考の世界にようやく気づき、それに親しみはじめるとともに、路地裏に限らず、実際インドネシアのいかに多くの人たちが同様の言語・思考体系を共有しているのかを知らされることとなった。

対象を政治に戻しても、それと関連する出来事を現地ならではの言葉や生活観（感）を通して伝えてみたいという気持ちは変わらない。ここでは、呪術師も含め、精霊（ジン）や悪魔など、そしておそらく何よりすべての創造主、神／アッラーと人々とのつながりに関心がなくては物事の理解の幅は限られるし、政治もそうだ。たとえば、人々はなぜ不遇に耐えられるのか。大統領はなぜ大統領となる覚悟を決めたのか。

もちろん、すべての住民が述べたようなつながりを強調して生きているわけではなく、大統領お抱えの呪術師や付随する精霊がいたとして、面と表に出てくるわけでもない。「見えないもの」へ関わり方は人それぞれで、政治には別の言葉が用意されてもいる。つまり、誰もが信じ、それとともに生きているのだとしても、ときにそれは話される必要のないものとなる。

さて、こうした事柄をどのように整理し伝えていけばよいのか。答えにたどり着くのは容易ではない。

カトマンズ奮闘記

林　　辰　弥
（国際社会文化専攻）

120mのコア採取を目指して学術ボーリング開始

「サンプルは山のように有るので心配せずに体一つで来て下さい」

私にとっての始まりは、酒井先生のこの一言だった。当時理学部で卒業研究に取り組んでいた私は、古カトマンズ湖（Paleo-Kathmandu Lake）の堆積物を研究するプロジェクトの噂を聞き、早速研究室を訪問したのだ。ヒマラヤ南麓の古気候・古環境変動を長い間記録し続けてきた古カトマンズ湖の湖底堆積物は、自然史の宝庫であり、その連続ボーリングコア掘削計画の真最中であると言う。再度訪れた私に一つの質問が用意されていた。「林君、体力に自信はありますか？」今まで様々なスポーツをやってきた私は、自分のプライドにかけて「あります!!」と即答してしまった。調印完了。かくして私のネパール行きが決まった。

私達の研究室は従来の地質学・古生物学的手法の他に、有機・無機分析や粘土鉱物の分析により古カトマンズ湖の誕生や消滅、モンスーン気候の変遷とヒマラヤ上昇の関係を学際的に研究している。私はこのプロジェクトで淡水珪藻を研究している。それは塩分を含まない湖水や河川、溜め池などに住む単細胞植物である。食物連鎖の底辺を担うために生産量は非常に多く、シリカでできた堅く繊細な骨格は化石として長い間保存される。そのため生活環境を異にする様々な化石群集を分析することが可能で、湖水の水質変化の研究に一役かっている。ちなみに有明海のノリの不作の原因の１つは、珪藻の大量発生にあった。カトマンズ盆地のボーリング試料には珪藻遺骸殻を含む地層が多く含まれ、盆地縁辺の露頭には最大４ｍに達する厚い珪藻土が見られる。それにも拘わらず、これまで珪藻に関する研究はほとんど行われていない。私にとって非常に美味しい、魅力的なフィールドである。

しかし、研究地域へ寄せる期待とは裏腹に、出発直前までどうしても不安を拭いきれないでいた。「下痢や吐き気は止まらないし、いかにもヤバそうな犬がうろついているから恐いよー！」今回は御留守番役の桑原先生の言葉である。私達は予防接種に足繁く通ったが、日毎に不安な気持ちは高まった。

2001年10月14日、半ネパール人の酒井先生と、純日本人の私と先輩の増留さんの二人が、ネパールの玄関口トリブバン空港に着いたのは夜中であった。最近ようやく電気が普及しはじめたと聞いていたので、飛行機の窓から見えた無数の街の灯は、古カトマンズ湖の湖畔を飛び回る螢の光のようで感動的であった。まずボーリングでお世話になるニッサク（株）のネパール事務所を訪れた。そこで出されたモモ（餃子）は抜群に美味しく、この食事なら大丈夫だとホッと一安心した。

最初の10日間は比較的平穏に過ぎた。まず作業の進行状況を確認するため、カトマンズ南方の山中にあるボーリングサイトを訪れた。事務所に持ち帰ったボーリング試料は、半分に切断し記載を済ませてから、プラスチックキューブを押し込み、古地磁気測定用の試料を採取した。最後に５cmごとに分割しサンプル袋に詰め、ナンバーをつけ整理をした。自然と肉体労働専門におさまった私は、ポーター兼助手として雇っていたネパール人のハルカバードルと、片言のネパール語と英語を使って作業を進めた。

堅いボーリングコアにプラスチックキューブを押し込む筆者（左）とハルカバードル（右）

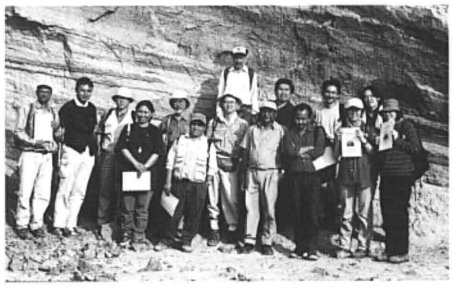
10月17日、ダサインのお祭りが始まった。日本で例えるなら御盆と正月を一緒にしたようなもので、約一ヶ月にわたり国内全土がお休みとなる。カラス、犬、牛、人間の他に車や機械を供養する習慣

も有り、その後には供物のヤギの頭がはねられ、安全を祈って車に血が塗られた。私はヤギの切ない声に耐えられず、物陰に隠れるように遠くから見物していた。しかし好奇心旺盛な増留さんは、ヤギのすぐ横でまじまじと観察していた。さすがに女性は強いと感心した。

10月後半になると巡検（野外現地討論会）に合わせて、新たに二人のメンバーが到着した。千葉大学でアジア各地の植生の研究をされている百原先生と、先輩で花粉分析を行っている博士課程の藤井さんである。巡検の初日は指導教官の酒井先生が、ボーリングサイトとその周辺の湖成層と河川層、及び扇状地堆積物が相互に移り変わる様子を、露頭を前に説明された。二日目は京都大学助手の酒井哲弥先生に、盆地北部－中部域を案内していただいた。そこには私達が今まで見た事も無いような湖成デルタの砂層が広がり、その中には古カトマンズ湖の湖水が上昇・下降した記録が残されていた。このような地層の成り立ちと構造は、研究室でテキストを読むだけではなかなか理解できない。私達は巡検に参加できたことで得した気分になった。ただし巡検中に、ヒルに血を吸われ悲鳴があがる事があったが...。

丁度その頃、ニッサク事務所を中心に風邪が流行り始めた。私も悪性の風邪にかかり当初39度近い熱に苦しんでいたが、前々より楽しみにしていた巡検に参加したいとの気持ちが天に通じたのか、順調に回復した。しかし尋常では無い体の異変に気付いたのは11月1日、奇しくも巡検初日であった。空腹であるはずの腹が突然膨らみ始め、しばらくすると突然の腹痛に襲われた。トイレから出ることができない。これはまさしく桑原先生に聞いていた症状である。どうやら体内にジアルジアという原虫が入ってしまったらしい。ほとんど眠れぬ夜を過ごしたが、絶食が効を奏し、どうにか二日目の巡検には参加する事が出来た。

しかし、悪いことは続くものである。ようやく体調がもとに戻りつつあった５日、脇腹の異変に気付いた。左脇腹にボタンの様な黒い物体がひっついているのだ。酒井先生に見てもらうと、「こりゃー、ダニだよ。どこで貰って来たの？」と一言。どうやら番犬のカーレと遊んでいた時にもらったらしい。よほど珍しかったのか、気がつけば私の周りには事務所の人も含めて10人近くのギャラリーが集まり、藤井さんにいたってはビデオカメラを回していた。酒井先生がピンセットで摘んでみたり、アルコールや殺虫剤をかけたりするものの一向に出てこない。そればかりか、いっそう潜り込もうとする始末だ。結局、頭だけが体内に埋もれたまま胴体が引きちぎれた。程よく脂肪のついた私の脇腹はよほど居心地が良かったのか、私は一週間にわたりダニの頭と共生することになった。



カトマンズ北部に広がるデルタ堆積物と巡検に参加した日本とネパール（トリブバン大学）の研究者達

この騒動が終わった頃、私達は植物巡検に参加する機会に恵まれた。盆地の南方に位置するプルチョーキと言う山で、標高2765mである。植生は高度や日照条件によって変化していき、例えば同じカシであっても麓（1300m）から山頂まで様々に変化をしていった。山頂からの眺めは素晴らしく、アンナプルナ、マナスル、ランタンと8000m級のヒマラヤの山々が見渡せた。ただ残念なことにエベレストだけはガスの中にぼやけて確認できなかった。

植物巡検が終わり百原先生と藤井さんが帰られると、出発当初のメンバーに戻った。私達学生二人は試料処理を終えた後、アンナプルナ方面に地質見学トレッキングに行く事になっていたため、収容所に閉じ込められたような単調な作業の毎日もなんら苦痛を感じなかった。アンナプルナの谷には、世界最高峰の連続断面が見られ、地質学を勉強するには最高のフィールドだと聞いていた。実際そこに到ると、私達の想像をはるかに超えた景観が広がっていた。造山運動により山脈がどのように発達してきたのか、視覚を通してダイレクトに伝わってくるようで、私達は圧倒されてしまった。まず大きな構造をしっかり把握して、その後細かい分析をする事の大切さを改めて感じる事が出来た。惜しむらくは天候の影響もあり、強行軍になってしまった事である。それよりも私の準備不足はもっと致命的であった。この次はもっと勉強をして、また訪れたいと思った。

私は、日本に着けば空白な気持ちになるだろうと考えていた。しかし実際には、山のような研究課題を見つけ、新たにやる気が沸くのを感じている。この野外調査を通して、自分の知識の余りにも少ない事、何であっても自分の目で見て考える重要さとその楽しさ、酒井先生が本当はネパール人である事に気づいた。この気持ちをいつまでも忘れず、来年スイスで開催予定の国際学会での発表を目指して、ボーリングコアと格闘するつもりである。